

タイトル：クライアントのための作業療法を実践するために

日々の臨床疑問を研究によって解決する

サブタイトル：今行っている作業療法は、本当に最良解であるのか

臨床で活躍されている作業療法士の皆さんは、日々、クライアントと真摯に向きあいよりよい生活を（再）獲得を目指して様々な介入を行っていることと思います。現在、作業療法においては作業に焦点を置くこと、また介入すべき作業を見極めることの重要性が再確認されています。しかし、実際に臨床で活躍されている作業療法士の皆さんは、介入すべき作業を見極めた後に『見極めた介入すべき作業に対してどのような作業療法を展開することが、クライアントのためになるのか』、『より効果的な作業療法があるのではないか』などという臨床疑問を持つことがあるのではないのでしょうか。

そこで、今回のワークショップでは、『実施している作業療法が、本当にクライアントのためになっているのか』、『実施している作業療法をより効果的にするためにはどうしたらよいか』を検証するための研究方法について皆様と意見交換できたらと思っております。例えば、本当にクライアントのためになっているのかを調査するためには、何をその指標として取りあげるべきなのか（標準的な評価結果か、それともクライアントの主観的な満足感か）、また介入効果を確認する際に、作業療法以外にも効果が期待できる要因（自然回復、理学療法など）をどのように分けるのかなど…。このような日々の臨床疑問を解決するための研究デザイン、また解析方法について作業療法神経科学研究会の理事である石岡俊之氏（埼玉県立大学保健医療福祉学部）、澤村大輔氏（北海道医療大学リハビリテーション科学部）を講師として具体的な事例、研究を交えて進めていきます。

作業療法神経科学研究会は、作業療法士の資格をもつ臨床家、大学教員、研究者の有志により、平成26年11月9日に発足しました。

作業療法学は、International Classification of Functioning, Disability and Health（ICF：国際生活機能分類）に基づき、活動や社会参加に必要な機能を解明し、「人の活動や社会参加」を維持・向上または再獲得する手段を生み出す学問分野です。近年、「人の活動や社会参加の学際的研究」を応用・適用した作業療法手段の開発研究をしている研究者や「人の活動や社会参加の学際的な研究」自体を研究主題とした作業療法学を礎としている研究者が活躍しはじめており、学問的な発展が進んでいます。しかしながら、高齢化やメンタルヘルス不調者の増加、対象者の増加とともに効率性、効果対費用が厳しく問われるようになり、今日の社会が抱える様々な問題に対し作業療法学が十分に応えるためには、更なる学問的発展が必要であり、この学問的発展のためには実際に臨床で活躍されている作業療法士と基礎研究者の協働が必須と考えております。本研究会は臨床作業療法士と作業療法学を礎とした基礎研究者の協働による、基礎と臨床が有機的に結びついた作業療法学を追求していくこと、また神経科学や心理学、経済学といった他の学問領域で蓄積されてきた知見・スキルを作業療法学に還元し、臨床応用を目指していく事を目的として活動しています。

このワークショップが皆様の臨床実践能力、また作業療法の事例研究、介入効果を検証する臨床研究の一助に、また作業療法学を追求していくための人材ネットワークを構築する機会としても実りある場となれば幸いです。皆様のご参加をお待ちしております。